ヨーロッパの街角から

都市の空気は自由にする
～ドイツのことわざ～

まちづくりを扱う仕事もあって私は日本とヨーロッパの都市のあり方に興味を持っているが、事例を追うだけでは「どう違うのか」はわかっても「なぜ違うのか」という根っこの部分が見えてこない。例えばドイツのまち並みは建物の高さや外観が厳しく制限され統一感がある。自己主張と権利意識が強い国でなぜそれが可能なのか不思議で仕方ない。建築法や都市計画が日本よりしっかりしているからという説明はその通りでも、それだけでは背景説明として不十分だ。こういったとき役立つのはやはり歴史の教えだろう。

ゲルマン民族の大移動に始まりルネサンス時代まで続く中世は、都市の発生と発展の時代でもあった。歴史学者鯖田豊之は著書「ヨーロッパ中世」の中で、都市の形成を多様な切り口から考察している。

11、12世紀の農業革命は食糧生産を飛躍させ、必然的に非農業人口の増加をもたらした。生活の余裕が生き方に多様性を与え、一かく千金を夢見て各地を巡る冒険商人が活躍するようになる。鯖田によれば彼らの数と力の増大が中世都市形成の出発点になったという。

冒険商人は越冬地としてお得意様の封建領主の居城近くに集落を造った。商人集落は拡大を続けて周辺の農村から人が集まり、さらに手工業者も定住するようになる。やがて彼らは自治と自由を求めて封建領主と対立し、幾多の衝突を経て12世紀初めには各地の都市が自治権を獲得する。

こうして形成された都市の住民は、封建領主の支配を離れて等しく市民の身分を持ち自由を享受できた反面、厳しい義務を負うことになった。互いに助け合い外敵に共同で戦う義務が課せられたのだ。市民の自由とは無条件に与えられるものではなく、まずは公益優先の責任ある自由だった。そう。ここですでに「官」でも「民」でもなく、市民自らが責任と義務を負う「公」の考え方が登場する。

例えば「番兵、柵、堀の建設、都市のあらゆる防備施設の経費はすべての市民が共同で負担する」「都市の防備にあたっては、いずれの地点に防御施設をおいても保証金支払い義務は生じない」「大騒動が起こったとき、直ちに武器を取って駆けつけなければならない。ただし市外でパンを焼いたりビールを醸造している者、病弱者は除く」など。

規則にあえてパンやビールが登場するのは、都市にとって食の管理が切実な問題だったことを示唆している。米麦飯におかずを添えればいい日本食と違い、ヨーロッパの食はパンや乳製品、保存食など加工度が高く不正がしやすい。パンなら水分を多めにする、雑穀を混ぜる、小さくするといったごまかしが容易で、昔話には粗悪なパンを焼き罰せられるパン屋がよく登場する。食に限らず、都市生活の根幹を守るための規制や監視は厳しく、市民は不正を許さないよう団結しなければならなかった。時を経ても、各種の制約と義務がなければ都市が立ち行かない公共の仕組みは一貫している。

ドイツには自由都市の肩書きを持つ自治体が多い。数百年前に勝ち取った自治と自由は今も市民の誇りであり、制限や義務、そして共同体意識がそれを支えている。

（在独ジャーナリスト　松田　雅央）

フライブルク大聖堂の壁に彫られたパンの輪郭は不正防止の基準。パン屋はこれより小さいパンを売ることが許されなかった